

1 【出題の意図と対策】

近年「読む」能力とともに、「話す・聞く・書く」能力の育成に力が入られています。入試においては、「書く」能力を判定する記述式の問題とともに、スピーチ・発表・話し合いなど、「話す・聞く」能力を判定する会話形式の問題も頻繁に出題されています。会話形式の問題では、発言者それぞれの意見の主旨やキーワードとなる言葉を的確につかみ、発言の内容を正確に読み取ることが大切です。普段から人の発言などを注意深く聞き、すぐに頭の中でポイントをとまとめる訓練をするように努めましょう。

【解答】

① 例 おおよその「だいたいの・おおまかな」

② ウ

③ ご覧になって「見られて」

④ 例 施設を確認をとり、断られる(13字)

【解説】

① ポイント《語句の意味を理解できるかどうか》

「概要」は「全体のあらまし」を意味します。

② ポイント《発言の内容を理解できるかどうか》

【場面2】の田中さんの発言に注目しましょう。ウは「Cさんはどうですか」などと他の人の発言を促して、自分が同意する意見については「ボランティア活動を行う日が間近に迫っているので、……」と理由も述べているので正解です。アは自分の発言は控えていないので誤り、イは反対意見の理由は念入りに聞いていないので誤り、エは自分の経験したことを述べたのは田中さんではなくBさんで、BさんのDさんの意見に対する反対意見についてはその理由を聞いていないので誤りです。

③ ポイント《敬語の知識があるかどうか》

「見る」を尊敬語にすると、「ご覧になる」になります。ここでは、文脈に合わせて「ご覧になって」と書き改めます。

④ ポイント《発言の内容を理解できるかどうか》

田中さんは、Bさんの「私は、とりあえず施設に連絡してみるべきだと思うけれど……。」という発言に対して、特に返事をすることなく話し合いを終えてしまいました。先生からそのことについて指摘されたので、Bさんの発言に配慮して、まず「施設を確認をとり、断られる」ようだったら、公園を清掃するボランティア活動に決定するという提案をするべきだったと反省しているのです。

2 【出題の意図と対策】

文学的文章(小説)の読解です。小説は、主人公のものの考え方や感性、その生き方などを通して、人間とは何か、生きることの意味は何かなど、人間にとって重要なテーマを読者に訴えかけようとするものです。ここでは三田誠広の『永遠の放課後』を題材に、主人公たちの行動や、心の動きを読み取ります。小説を読むときには、できるだけ登場人物の立場に立って、その境遇や心情に寄り添いながら読むようにしましょう。

【解答】

① a やっかい b いと d くったく

② 結局、杉田

③ A 孤立

B 他人を拒否している

④ 例 自分には興味のないくだらない会話をするクラスのやつらのレベルに合わせて、くだらない冗談を言うこと。(48字)

⑤ エ

⑥ イ

【解説】

① d 「屈託」は「何かを気にして、くよくよする」という意味

の言葉です。「屈託のない」という形で使うことが多いです。

② ポイント《人物の行動の理由を理解できるかどうか》

杉田の家は開業医なので、医学部に入らなければならないという自分の未来が決められていて、自由に生きられないのだという悩みを「ぼく」に話しました。このように悩みを話してくれるのは、杉田が「一本気な性格だが、細かい心づかいもあわせもっている」からであり、「結局、杉田は、自分にも悩みがあることを語って、ぼくを励ましてくれたのだろう。」と「ぼく」は考えています。

③ ポイント《人物の行動を理解できるかどうか》

「ぼく」について杉田は、「クラスの中では孤立している」「おまえは他人を拒否している。人が自分の心の中に踏み込んでくることが恐れているんだ」と指摘しています。いっぽう杉田は、「いつも仲間にもまれて」います。しかし、そんな杉田自身も、実は「ぼく」と同じなのだと言っているのですから、自分も「他人を拒否している」「人が自分の心の中に踏み込んでくることを恐れている」のだという点で同じだと言っているのだとわかります。これを踏まえて、空欄に当てはまる言葉を答えます。

④ ポイント《人物の行動を理解できるかどうか》

「とりつくる」とは、「その場をなんとかごまかす」という意味です。「いつも仲間にもまれて」杉田は、「ぼく」と同じで「他人を拒否している」「人が自分の心の中に踏み込んでくることが恐れている」のだと言っています。「仲間」の会話は「くだらないものばかり」で、「おれはそんなものに興味はない」けれど、杉田は「クラスのやつらのレベルに合わせて、くだらない冗談を言って」「明るくふるまっている」のです。だから、自分分は仲間にもまれていただけなんだと、杉田は言っています。つまり、杉田は「相手に合わせて会話をとりつくる」っているのです。

⑤ ポイント《語句の知識があるかどうか》

エは「思っていることを隠さず言う」という意味です。アは「大勢の人がいる中で、最初に話し始める」、イは「決心する」、ウは「大勢の人が同じことを言う」という意味であることから、最適なのはエだとわかります。

⑥ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》

杉田は、「ぼく」との二人だけの時間を大切にしていました。紗英と三人でのギターの練習をしても、すぐに練習を終わらせて、二人の時間を持つとしました。また、杉田は「落ち込みそうになるぼくを励まして」くれるなど、いつも、「ぼく」を親友として扱ってくれました。そんな親友がいるということが、「ぼく」の心の支えになっていたのです。

3 【出題の意図と対策】

説明的文章の読解です。論説文は、あるテーマに関する研究内容やデータなどについて、筆者が考えを述べた文章です。ここでは、村上陽一郎の『文化としての科学／技術』を題材に、私たちは科学技術とどう向き合うべきかについて考えます。論説文を読むときには、その文章が何について書かれているかを理解し、そこから筆者がどういう結論や考え方を導き出しているかを読み取るようにしましょう。

【解答】

① c 参画 d 異(なる) f 推測

② 利便性、快適性、効率の良さなど

③ ウ

④ 文法的説明 ア

⑤ 同じ意味・用法の文 キ

⑥ A 技術と向き

B ひたすら技

⑥ 例 現代人の生活空間そのものになり、「見えない」ものになつてしまった科学や技術を、生活者一人一人が見ようとする意識を持ち、また自分の専門分野以外にも関心をもつことで、

「見る」ための「眼力」を育てること。(99字)

【解説】

- ① ③ 「参画」とは、「計画などに加わること」を意味します。
 ② ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
 ③ ④の直前に「過去との比較という点で」とあることと、設問文から、現在と過去を比較する視点が、本文中に二つ述べられているのだということがわかります。第二段落では、現在と過去を「利便性、快適性、効率の良さなどを過去の生活空間と比較」しようとしています。これが、一つ目の視点です。しかし、この視点は筆者が生きてきた間でさえ「ほとんど比較を絶する」ものであり、比較することを止めています。そこで、一つ目の視点とは別の視点を取り上げ、論を展開しようとしているのだというをおさえましょう。③の直後では「過去における技術」はどうであったのか、それに対して「今日の生活空間のなかでの技術」はどうであるかを取り上げ、私たちは技術とどう向き合っていけばよいかについての筆者の考えを述べる、という文章構成になっていることを捉えましょう。

③ ポイント 《文章の内容を正しく理解できるかどうか》

第三段落以降では、過去と現在の技術のあり方を比較するという文章構成を押さえます。③は過去の技術のあり方のことですから、現在の技術はどのようなかを押さえ、それと比較できる内容を選択肢の中から選びましょう。現代の技術のあり方が書かれている第四段落以降で、「技術は見えなくなっている」、「科学や技術は『見えない』ほどにすっかり空間の要素となってしまう」と書かれているのを押さえ、これと比較できる内容を考えると、ウが最適だとわかります。

④ ポイント 《「ない」の識別ができるかどうか》

⑤の「交換するほかはない」と、キの「休む時間がない」は、形容詞です。オは補助形容詞、カは助動詞、クは形容詞の一部です。

⑤ ポイント 《文章の内容を正しく理解できるかどうか》

⑥に「車に似た状態」とあるので、まず、車はどのような状態にあるのかを押さえます。すると第五段落で、「現代の車の修理」は『見える』故障に関わるものではなくなっている」と書かれているのが見つかります。車の故障は「見えない」ものになってしまったのです。ここから、⑥は「われわれの生活空間そのもの」も「見えない」ものになってしまったのだ、ということ言っているのだとわかります。これを踏まえて文章を読み進めると、第六段落に、「いつ、誰が、どのようにしてつくったのか」が生活者の目には触れることなく、私たちは技術がもたらす利便性を享受しているのだということが書かれているのが見つかります。つまり、いつの間にか誰かがしてくれているという形でしか、「技術と向き合えない状態」におかれ、自分たちが技術によってもたらす利便性に何を求めているのかを考えることもないまま、「ひたすら技術の所産を受け入れ、それによって、変わっていく」という状況にあるのだと書かれています。

⑥ ポイント 《文章の内容を理解してまとめられるかどうか》

第九段落で、科学や技術は『見えない』ほどにすっかり空間の要素となってしまった」が、私たちは「この空間の在り方」「未来の在り方」に責任を感じなければならないのだと書かれています。これを踏まえ、科学や技術を「われわれの意志で管理していかなければならない」と言っているのが⑥です。直後に「そのためには、生活者一人一人が、まず『目』を逸らさずに『見よう』とすることから始めなければなりません」、見るための「眼力が必要」だと書かれているのを押さえます。また、眼力を育てるには、例えば非理工系の人が理工系にそっぽを向かないようにする、理工系の人が社会にも関心を持つといった、自分の専門分野以外のことにも関心を持たなければならぬということが書かれています。これらの内容を押さえて、指定の字数に合わせてまとめましょう。

【出題の意図と対策】

古文とその解説文の読解問題です。古典文学は、日本人

の感性や独特の文化を創り上げる礎となった貴重なものです。ここでは、『徒然草』について、森本哲郎が解説を書いたものが題材になっています。古文は、かなづかいや表現法が現代文と違い、難解なものに感じられるかもしれませんが、作品を通して、いにしえの人たちの心に触れてみましょう。

【解答】

① 日本独特の

② おなじようにも

③ 工

④ A **例** 自分自身が繰りかえし読む(12字)
 B 読書の歴史

【現代語訳】

「薄い織物で張った、巻物や書物の表紙は、すぐにすり切れてしまうので困る」とある人が言ったところ、頓阿が、「薄物の表紙は上下がほつれ、螺鈿の軸は貝が落ちた後こそすばらしいのである」と申しましたのこそ、すばらしいと思ったことだ。何冊かでひとまとまりとなる書物などが、(見た目が)同じようではないのを見にくいと言うが、弘融僧都が、「物を必ず一揃いにとのえようとするのは、つまらない者がすることだ。不揃いであるのこそよいのだ」と言ったのも、すばらしいと思ったことである。

「おしなべて何でもみな、完全にとのつっているのはよくないことだ。し残してあるのを、そうして放っておいたのは、面白く、寿命が延びると思われるやり方である。内裏をお造りになるのも、必ず造り終えないところを残すものである」と、ある人が申しましたことだ。先賢の書いた伝典と、伝典以外の書物にも、章段の欠けていることこそあるものです。

【解説】

① ポイント 《文章の内容を正しく理解できるかどうか》

解説文の第一段落に注目しましょう。「兼好は頓阿のこの言葉にいたく感心し「私もまたそのようなもの見方に大いに共感する」とあるのが見つかります。これを踏まえて第一段落を読み進めると、頓阿のこのような見方こそ「日本独特の不完全の美学」であり、筆者自身も日本人だからこそ、頓阿の見方に共感できるのだらうと書かれています。

② ポイント 《かなづかいの知識があるかどうか》

歴史的かなづかいの「ア段の音十う(ふ)」は「才段の音十う」に直しましょう。

③ ポイント 《文章の内容を正しく理解できるかどうか》

「いみじく覚えしなり」は、「すばらしいと思ったことである」という意味です。古文中で兼好が「いみじく覚えしなり」と言っているのは、「物を必ず一具にととのへんとするは、つたなきものとする事なり。不具なるこそよけれ」という弘融僧都の言葉です。したがって、この言葉を正しく訳せている工を選びましょう。

④ ポイント 《文章の内容を正しく理解できるかどうか》

解説文の第四段落、第五段落に注目しましょう。筆者は、「書物の真の美しさとは、その本がどれだけ読まれたか、という読書の歴史がつくりあげるもの」「書物の美とは、繰りかえし読むことよって書物ににじんでくる美しさである」と述べています。また、ただ読むだけではなく、「その歴史は、あくまで自分がつくりあげた歴史でなければならぬ」とも書かれています。「繰りかえし読む」「自分がつくりあげる」「読書の歴史によつて、書物の真の美しさがつくられる」という点を押さえてまとめましょう。